

札幌市立定山溪中学校の取組

1. 研究のねらい

本校の学校教育目標は「豊かな心を持ち、たくましく伸びゆく生徒の育成」である。この具現化にむけ、いくつかの方針をたてており、「地域に開かれた信頼される学校づくり」を一つの柱に据えている。ここでは、地域社会に心を寄せる生徒の育成を図ることを目的に、豊かな自然に囲まれた環境を活かし、ここでしかできない特色のある活動を実践しようと、平成 22 年度から「森林教室」に取り組んできた。

札幌市では、ふるさと札幌に立脚した「自立した札幌人」の育成をめざし、札幌らしい特色のある学校教育の各学校が共通に取り組むテーマの一つに「環境」を掲げている。本校は、森林教室での活動を通じて、地域教育力の活用をはかり、生活体験や社会体験を広げ、身近な地域のことから環境全体について考えることができる生徒の育成をめざす。森を育て、森から学ぶ活動は、地球環境にかかわる多くの課題を体験的に学ぶことでもある。また、「ふるさとの森に木を植え育てた」経験は、ふるさとを大切に慈しむ豊かな心を育むものであると考える。

2. 取組内容

(1) 第 1 回 森林教室

5 月 14 日の第 1 回森林教室では、三笠緑地における保全活動区域の面積を、GPS を利用して調べる体験や、どんな植物がどれくらい生えているのかを 1m^2 ごとに調べる植生調査、周辺の山林内との植生の比較などを行った。北海道森林管理局石狩地域森林ふれあい推進センターの牧野自然再生指導官はじめ、4 名の方々に教えていただき、生徒たちは足下の植物を踏まないように気を付けながら、真剣に実習に取り組んでいた。

(2) 第 2 回森林教室

7 月 9 日の第 2 回森林教室は、～無意根山周辺植物群落保護林「緑の回廊観察会」～と題し、無意根山大蛇ヶ原の高層湿原や周辺の森林環境について、山登りをしながら観察学習を行った。「緑の回廊」とは、空沼岳から中山峠、無意根山にいたる稜線一帯の森林生態系保護を含む自然豊かな区域で、定山溪中学校が植林活動をしている水源の森の源流部でもある。北海道大学の春木雅寛先生や、石狩森林ふれあい推進センターの森林再生指導官の方々の解説で、無意根山の成り立ちや土壌のこと、標高が高くなっていくにつれ森林の様子が変化すること、貴重な高層湿原では普段目にする機会の少ない生物の観察や環境保全を学んだ。



(3) 理科・社会合同フィールドワーク

7 月 14 日（月）、羊ヶ丘にある森林総合研究所北海道支所を訪ねた。研究本館で牧野支所長から、北海道の森や研究内容のお話をいただいたあと、平川浩文先生の研究室を訪問、北海道の野生動物についてお話を聞いた。平川先生は「ダーウィンがきた」というテ

テレビ番組に出演し、コウモリの研究紹介をされたこともあり、生徒の質問に対し、興味深いお話をして下さいました。屋上では、山野井 CO₂ 収支チーム長から、高さ 40m の観測装置を見ながら、樹木が光合成でどれほどの CO₂ を吸収しているかの研究結果や、地球温暖化とのかかわりなどを学んだ。

(4) 第 3 回森林教室

9 月 24 日、奥定山溪の水源の森に、苗を植えに行きました。先輩たちが現地で採種してきた種を苗に育て、切り開かれた土場跡地に植えはじめるようになってから 3 回目の植栽である。これまで、種が大きく苗に育てやすかったミズナラやイタヤカエデ等を中心に植えてきたが、より多様性のある森づくりをめざし、今年度からは、



昨年現地で山どりした苗ダケカンバやケヤマハンノキ、ナナカマド等を学校で育て、カミネツコン式にして植栽した。しかし、多くの苗がカシワマイマイの食害を受けたことで、小さな苗にとっては山地の自然環境も厳しく、無事に成長できるものばかりではないことを生徒たちは実感していた。

最後に、来年度の植栽用に、林道わきに芽を出してしまったトドマツの他、何種類かの苗を掘り取り、持ち帰った。森づくりは長い年月がかかり、年々の環境変動の中ですべてが順調にいくわけではないが、粘り強く活動を続けながら故郷の自然環境保全に寄与していくことの大切さを生徒たちに気付かせることができた。

3. 成果と課題

(1) 成果

地域や環境に対する意識のさらなる高まりが得られた

この活動の一番の成果は、生徒たちが自分のふるさとを自分たちの手で再生しているという喜びと、その意識の醸成にある。さらにこの活動は札幌全体の環境を守り、支える一助になっているという自負をもてたことである。この植栽した苗は、自分たちで現地の母樹から取ってきた種を育て、自分の名前を付け植栽したものであるため、「自分事」として捉える生徒も多かった。しかし、すくすく育つものばかりではなく、多くは食害や雪害や野性動物の被害を受けている。その傍らで樹齢 500 年を超えるミズナラの巨木もある。この事実により「自然の厳しさと生命力の尊厳」を実感する生徒も多かった。



(2) 課題

毎年同じ内容にならないように 3 年サイクルでカリキュラムを行っているが、年間行事予定に組み込む際、他の行事とのバランスを考慮する必要があるため、教職員の理解を得ながら進める必要があることや、バスの費用をどう捻出するか等が課題である。